

聖書：ヨハネの黙示録 2：1～7

説教題：初めの愛に

日時：2020年11月29日（朝拝）

前回、栄光に輝くキリストが7つの金の燭台の真ん中にいる様子をヨハネが見たという部分を読みました。7つの金の燭台は、1章20節に記されていましたように、7つの教会のことで、その7つは直接的には1章11節に記されていたエペソ、スミルナ、ペルガモン、ティアティラ、サルディス、フィラデルフィア、ラオディキアの教会を指します。しかしこれまでも繰り返し述べて来ましたが、この「7」は完全数を意味していて、この7つの教会という表現で全時代の全教会を表しています。ですから7つの燭台の真ん中に栄光のキリストがいるという幻は、栄光のキリストがあらゆる時代のすべての教会の真ん中におられることを意味します。人間の目で見れば当時の教会は迫害の中にあり、困難のただ中にありました。しかし黙示録が明らかにする天の視点によれば、教会は栄光のキリストがその真ん中にいてくださるところです。そしてキリストはただいるのではなく、ご自身の十字架と復活を通して得たあらゆる恵みをもって豊かに教会を養い、守り、教会が最後の栄光の状態に達するように導いてくださっています。この神の視点を受け止め、主に喜んで従って行くように！と私たちも導かれています。

これから見る黙示録の2～3章には、このキリストによる7つの教会一つ一つへのメッセージが記されています。キリストはその真ん中におられる方として一つ一つの教会を良く知っておられます。そして教会が世の光としての燭台の使命に生きることができるために、その長所を称賛して励まし、短所を指摘して悔い改めを求め、警告と約束の言葉をもって導こうとしておられます。私たちはこれから見る7つの教会に対するイエス様のメッセージによく聞いて、自らに当てはめ、いよいよ世にあって真の光を放つ教会となるように導かれて行きたいと思います。

まず1節は「エペソにある教会の御使いに書き送れ」と始まります。なぜ「教会に」ではなく、「教会の御使いに」と言われているかについては前回触れました。この黙示録の表現から分かることは、神は御使いを通して教会を守り導いておられるということです。教会は単なる地上的存在ではなく、天とつながっている存在であるということです。そしてキリストはここでご自身のことを「右手に七つの星を握

る方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる」と表現されました。7つの星とは、1章20節にあった通り、7つの教会の御使いたちのこと。その御使いたちをしっかりと御手に収め、7つの金の燭台の間を歩かれる方、すなわちただ7つの教会の間を歩き回り、教会を良く知り、これを心にかけ、導いておられる主が言われるということです。

そうしてまずエペソ教会の長所が2~3節で褒められています。「わたしは、あなたの行い、あなたの労苦と忍耐を知っている」と。エペソはアジア州最大の都市でした。パウロが第三次伝道旅行で約3年間、集中的に伝道した町で、この地方の中心的な教会だったでしょう。「あなたの行い」と言われるほどエペソ教会は活動的な教会だったと思われます。またその陰には労苦と忍耐もありました。周りの人々はその姿を評価しないかもしれませんが、主はすべてを見て知っておられ、高く評価してくださっています。そして彼らの優れた点として、特に偽りの教えを述べる者たちを見抜いたことが取り上げられています。パウロはエペソの地を離れる時、その長老たちにこのように警告したことが使徒の働き20章29~30節に記されています。「私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」 彼らはこの言葉を良く心に留めていたのだと思います。そして実際にそのことが起こりました。自称「使徒」、すなわち偽物の使徒たちが現れ、誤った教えを広めました。エペソの信者たちはこれを鵜呑みにせず、本当に神からのものかどうかを試し、それを偽りだと見抜きました。この取り組みは大変だったようです。3節で「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れ果てなかった。」とされています。多くの人々が入り出る大都会エペソで、彼らは正しい教えを守り、健全な教理を保った正統的な教会でした。行いにおいても立派で、その労苦や忍耐も称賛され、神学的にも正統的。さすがこの地方の中心的教会、模範的教会と見えたことでしょう。

ところがでした。その後に厳しい主の言葉が続きます。4節：「けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」 これは衝撃的な言葉です。「愛」はキリスト教のエッセンスとでも言うべきものです。その愛からあなたがたは離れてしまった！とされています。どういうことでしょうか。多

くの人が言うのは、エペソ教会は偽りを見抜き、正統的な神学を保とうとするあまり、愛が冷えてしまっていたということです。誤りを警戒するあまり、お互いをいつも疑いの目で見、批判の言葉ばかりが口を突いて出て来て、その交わりはギスギスしたものになっていた。正しい教理は持っているが、愛がそこに欠けていた。もちろん私たちは、これだから教理的な正しさはあまり追求すべきでないと言ってはならないと思います。この後、イエス様は他の教会に対しては偽りの教えを許容していることを問題にされます。ですから正しい教理が悪いわけではないのです。それは必要です。イエス様もそのことでエペソ教会を褒めています。しかし私たちが心に留めるべきは、正しさを求める教会には往々にしてこのようなことが起こりやすいということ。エペソ教会もその罠に陥っていたと考えられます。

そして私たちはこれについて、彼らは神への愛はあったが人々への愛が欠けていたと表現することはできないと思います。彼らは確かに真理に対して熱心でしたが、神への愛、主への愛においても、初めの愛から離れたとここで言われていると考えられます。むしろ神との関係における「初めの愛」から離れたから、人々との関係にもそれが現れていたと言うべきではなかったでしょうか。

それにしてもこれは痛烈に突き刺さる言葉です。パウロはコリント人への手紙第一 13 章 1～3 節で、愛がなければすべてが空しいと言っています。たとえどんなに立派な奉仕をしても、どんなに正しい知識を持っていても、またどんなに多くの犠牲を払っても、愛がそこになければ何の役にも立たないと。私たちのすることすべてに意味と価値を与えるのは、それが愛によってなされたかどうかであると言われています。ですからエペソ教会は色々な働きをし、多くの労苦をささげていましたが、今のままでは彼らのしていることはイエス様の前で価値のないものになってしまいます！

どうしたら良いでしょうか。イエス様はその回復のための道筋をここで示しています。3 つのステップが述べられています。その第一は「どこから落ちたのか思い起こす」ことです。彼らはかつては主を愛して歩んでいました。「初めの愛」とあるように、主を知った最初の頃、彼らは純粹に歩んでいました。主に心から感謝し、主を心から愛して歩んでいました。そのかつての姿、落ちる前の状態を思い起こす。第二にすることは「悔い改める」ことです。これはただ悲しく思うことでなく、生

活の方向転換です。なぜ自分は初めの愛から落ちてしまったのか。それは主との間に何かが割り込んだからに他なりません。主への信仰は主との結婚関係にたとえられています。その主との関係を大事にするよりも、他のものに第一の関心が奪われる霊的姦淫を犯すようになってしまった。その結果、主への愛が冷えたのです。その間に割り込んだものは、それ自体悪いものでないかもしれませんが。正しい優先順位のもとで位置づけられれば良いものかもしれません。しかしそれが主よりも大事になり、自分の多くのエネルギー、多くの関心を奪い取ってしまい、主への愛が冷えてしまった。初めの愛から離れてしまった。あるいは罪深い何らかの生活、罪の楽しみが主との関係を壊したのかもしれません。自分はどこから落ちて、今この状態に至ったのか。それを良く考えてもう一度自分の生活を整理すること、正しいあり方へと方向転換することです。そして第三に「初めの行い」をすることです。かつて主を愛し、主との正しい関係に歩んでいた時のように歩むことです。それはあの時のように主を求めて日々熱心に御言葉を慕い求めて読むこと、日々主に祈りながらともに歩むこと、主が言われることなら何でも優先して取り組もうとすることを含んででしょうし、私たちそれぞれが主に従い始めた時の「初めの愛」を思い起こし、その時の行いを思い起こすことによって自らに適用すべきことでしょう。

イエス様はこの言葉に厳しい警告をつけておられます。5節後半：「うせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。」もし主との愛の関係に立ち戻らないなら、教会また私たちは光り輝くことはできません。愛なしでは輝くことはできず、光を失うのみです。その結果、その教会はついには存続できなくなるかもしれない。イエス様はこのようにして、その状態のままではいけない！と真剣に語っておられます。

しかしそんな厳しい言葉の後に6節の言葉が続けられています。キリストは今、厳しい言葉で叱りましたが、もう一度ここで彼らを褒めています。つまりただ叱っているのではないということ。良いことは良いこととして認めておられるということです。ここに出て来るニコライ派の人々はどんな人たちなのか詳しくは分かりませんが、この後の15節のペルガモン教会への言葉の中にも出て来ます。そちらを見る時にもう少し詳しく見たいと思いますが、おそらく当時の異教社会にあって、偶像礼拝やそれに伴う不品行、不道徳を許容する人々だったようです。ここで「ニコライ派の人々の行い」を憎んでいるとあるように、「行い」に現れる問題が、その

人々の教えにはありました。エペソ教会は正統的教理を保つ教会らしく、その偽りを見抜き、その行いを憎んでいました。イエス様はその点はわたしも一緒だ！と言って、彼らを称賛しています。エペソ教会にはこのように主と歩調と合わせて共に歩んでいるところもあるのです。ですから、まだそういう長所がある間に、手遅れにならない間に、初めの愛に立ち戻り、その愛においてもともに歩む者となるように！とされています。このような言葉を通して彼らを導こうとされる主のご配慮、ご熱心を思わされる部分です。

最後の7節は全教会に対する呼びかけです。「耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」 「耳のある者は」とは「聞く耳のある者は」ということでしょう。たとえ聞いても、軽く受け流して反対の耳から出て行くような人には、この言葉は意味を成しません。私たちはこれによく聞いて自らに適用しなければならぬということです。

「勝利を得る者」とは、今見たキリストのメッセージに聞き従い、その課題に取り組んで打ち勝つ人のことです。それに打ち勝つための恵みはキリストが十字架と復活を通して勝ち取ってくださっています。そのキリストに信頼し、キリストに祈り、キリストからの力をいただいて、この課題を克服する人。その人への約束が最後に語られています。「わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。」 ここにあの「いのちの木」が登場しています。ご存知の通り、聖書が一番初めの書、創世記に記されていたものです。アダムとエバの墮落によって私たちが失ったものです。その木に至る道は閉ざされたことが創世記3章の最後に記されていました。しかしそのいのちの木への道は、永遠に閉ざされたではありませんでした。その道がここに再びこうして開かれています。それは神のパラダイスにあります。パラダイスは「庭園」を意味する言葉です。この道を進み、勝利を得る者は、神の庭園、神の楽園に入ることを許され、あのいのちを象徴するいのちの木から取って食べることができる者とされる。この世のどんな祝福よりもはるかに素晴らしいもの、私たちが何よりもあこがれ待ち望むべきものでしょう。

これは私たちの今ここでの主を愛する歩みの先に用意されています。あの創世記のエデンの園にあったもの、またやがての神のパラダイスに用意されているものは、愛である神との交わりの生活です。またその神の愛を基礎とする互いに愛し合う交

わりの生活です。そこに入る私たちは、今ここにある時から神のパラダイスを支配する「愛」に生きる者でなければならないということです。反対から言えば、今ここで主を愛し、人々を愛して生きることをしない人が、天国に行ってそこに馴染めるのか、その世界を本当に楽しめるのか。むしろ私たちはこの地上で愛に生きる者として導かれ、本来の人間性を回復され、神のかたちに造られたものとしての特性をいよいよ発揮するプロセスを経て、そのゴールとしての神のパラダイスに入ります。そしてそこであのいのちの木から取って食べる祝福にあずかるのです。その世界がこの黙示録の最後の 21 章と 22 章に記されます。その究極の幸いに至るために今ここで取り組むようにとされているのが、この初めの愛に立ち戻って生きることなのです。

私たちは果たして耳のある者でしょうか。キリストは今日の御言葉を通して、もう一度主との関係を見直して、愛に生きるようにと私たちを招いています。もし「初めの愛」からいくらかでも離れてしまっている自分を思うなら、私たちは今日のイエス様の言葉に真摯に聞きたいと思います。初めの愛に立ち戻るように！と。イエス様を愛する愛を考える時、まずその愛は私たちの内からは出て来ません。私たちが愛に駆り立てられて歩むための秘訣は、私たちの愛に先立つ神の愛に触れることです。神の愛は御子キリストを私たちの罪の身代わりとして十字架の上にささげてくださいましたことにおいて、この上なく現されています。その御子の十字架のもとに行き、自らの罪を告白し、この自分の罪が全く赦されるという恵みを豊かに受け取ること。一度罪の赦しを得てもまた罪を犯したことを思うなら、何度でも、毎日、日々そのようにすること。その時に必ず主に対する私たちの愛は燃え立たせられずにはないはず。その初めの愛に絶えず立ち戻り、愛によってすべてのことを行うように！と主は招いています。それこそ私たちの生活のすべてを価値あるものにするということです。そのように歩むなら主の燭台としての教会は確かに光り輝くことができるでしょう。そしてその歩みの先に主は私たちが神のパラダイスに入る者とされ、いのちの木から取って食べるという究極の祝福を用意してくださるのです。